

「RECNAの今後を考える」
広島から見える長崎とRECNA、そしてその今後

2022年9月17日
宮崎園子 広島在住フリーランス記者

広島から見える長崎、そして RECNA (私の印象)

- 一言で「被爆地」と言っても日々使う言葉が違う…その表現に込められたものは何か。
 - 平和「記念」式典ではなく平和「祈念」式典
 - 「平和記念」資料館ではなく「原爆」資料館
 - 「爆心地」ではなく「原爆落下中心地」

- 多世代の参画と議論の透明性
 - 平和宣言の作り方の違い
広島：平和宣言に関する懇談会＝有識者や被爆者で構成。冒頭以外非公開。議事録を情報公開請求しても一部黒塗りで開示される。
長崎：平和宣言文起草委員会＝有識者や被爆者、ナガサキ・ユースの若者たちで構成。会議は全公開。議事録はネットで公開（発言者は明記せず）
 - 平和式典の違い
広島：司会者は広島市職員、被爆者によるスピーチなし。
長崎：司会者は地元高校生、被爆者によるスピーチあり。

- 「平和研究」ではなく「核軍縮」でもなく「核兵器廃絶」を掲げたRECNA (7月2日片峰先生のプレゼン)
 - 広島大学「平和センター」、広島市立大学「広島平和研究所」
 - 目的・使命の具体性と「被爆地・長崎だからこそ」という個性
 - 「核兵器廃絶市民講座」「核兵器廃絶長崎連絡協議会」「核兵器廃絶地球市民長崎集会」等、長崎には「核兵器廃絶」を明確に掲げた名称が多い。広島には「核兵器廃絶をめざすヒロシマの会 (HANWA)」。

- RECNA「世界の核弾頭データ」ポスターの存在の大きさ。
さまざまな形で平和活動を展開する人たちが、ツールとして活用している。
(もちろん私自身も)

一貫して目指してきた「長崎を最後の被爆地に」という思いをストレートに「核兵器廃絶」というフレーズに込め、被爆者も若者も行政も一緒になってオープンな議論をしているまち

長崎におけるRECNAの役割と必要なもの（私の提案）

● 市民活動とアカデミアのよき連携。専門家集団たるRECNAの蓄積を市民が積極的に活用して、それぞれの市民活動を展開する、という姿を。事実に即した語りや、国際情勢に即した語りのためには、長崎で積み上げられてきた研究が必要となる。RECNAの蓄積が市民に活用されるためにも、市民の多くが抱きがちなアカデミアの「敷居の高さ」を乗り越える必要性はある。（広島にいる自分から見たら、長崎は既に乗り越えられているようにも見える）

● 「核兵器廃絶」という長崎（および広島）固有のメッセージを、いかにIntersectionalに展開して裾野を広げていくか。気候変動、ジェンダー平等など、若者の中で関心が高い社会課題との連携を。

● 誰でもなんでも発信することができるSNS時代。その主体はあくまで、「個人」であること。組織ではつながりにくくても、個人であれば、しなやかに縦横無尽にさまざまな形での連携・連帯ができるポテンシャルがある。

● そうやって点が線になり、線が面になっていくための「通訳」者、ファシリテーター育成の重要性。組織と組織、個人と個人、組織と個人・・・問題意識やそれに基づく蓄積を持ったさまざまな組織や個人をつなぐ存在の重要性がますます高まっている。（広島でいうなら、「ソーシャルブックカフェ・ハチドリ舎*」のような存在・場所）

*ハチドリ舎：広島・平和記念公園の西にあるブックカフェ。毎月6がつく日に、被爆者たちが来店し、コーヒーなどをのみなながら対話ができる。また、営業日はほぼ毎晩、国内外からさまざまなゲストを招き、各種社会課題について議論をするイベントを、会場及びリモートのハイブリッド形式で展開している。

多様な、そして多面的な繋がりがいくつも生まれていくことによって、長崎という場所をより広く、深い、議論と対話の場所にアップデートできる。（その先に、さらなる長崎＝広島の連携）

「核兵器廃絶」に向け、被爆者、若者、行政が多様な形で繰り広げるオープンな議論の真ん中に常に存在し、活用される、長崎の平和活動のハブとしてのRECNAへ。

宮崎園子 広島在住フリーランス記者

1977年、広島県生まれ。東京、香港、米国など一貫して広島の外で育つ。慶応大卒業後、金融機関勤務を経て2002年、朝日新聞社入社。神戸（3年）、大阪（10年）、広島（6年）で勤務後、2021年退社。小学生の子ども2人を育てながら、広島を拠点に取材・執筆を続ける。7月に著書『「個」のひろしま 被爆者 岡田恵美子の生涯』を上梓。